「青森のリンゴ」から学べること

りんごは、青森県の特産品の一つだ。

国語の教科書に何気なく書かれている一文です。

カンジーはかせの

都道府県の旅 1

かせたちは、日本全国をめぐる旅に出かけました。みなさんもはかせといっている気持ちになって、――線の都道府県名を使った文を書きましょう。

①北海道では、じゃがいもが多く生産されている。

②りんごは、青森県の特産品の一つだ。

③わんこそばは、岩手県の名物だ。

④宮城県では、有名な七夕のお祭りが行われている。

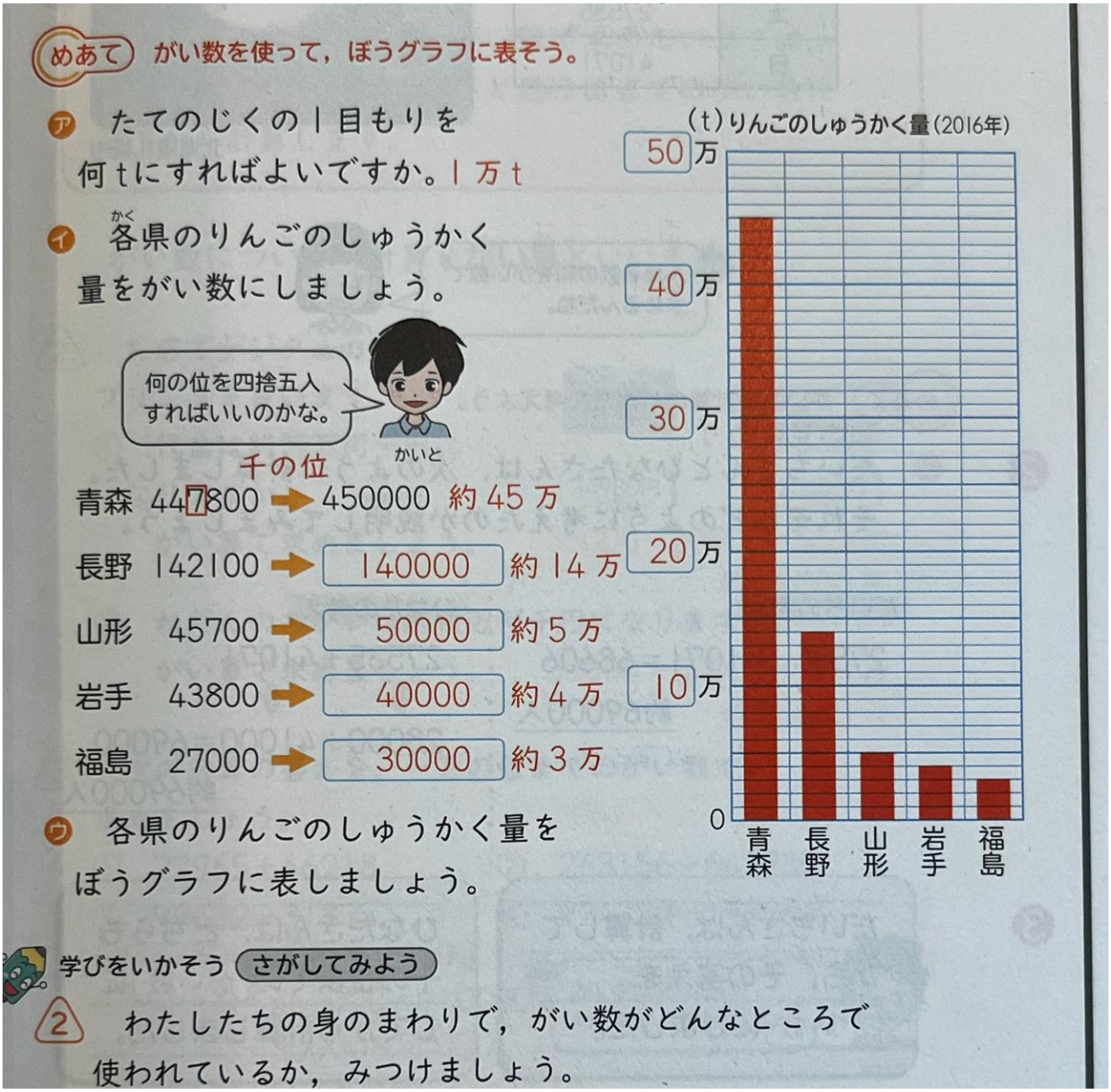
⑤なまはげは、秋田県の年まつの風物詩だ。

⑥山形県では、さまざまなしゅるいのさくらんぼが生産されている。

⑦赤べこは、福島県の工芸品だ。

おそらく、多くの日本人はここに違和感を覚えないでしょう。

算数の教科書にも、次の問題が出てきます。



めあて　がい数を使って，ぼうグラフに表そう。

ア　たてのじくの１目もりを何tにすればよいですか。１万t

イ　各県のりんごのしゅうかく量をがい数にしましょう。

何の位を四捨五入すればいいのかな。

かいと

千の位

青森　447800 → 450000　約45万

長野　142100 → 140000　約14万

山形　45700 → 50000　約5万

岩手　43800 → 40000　約4万

福島　27000 → 30000　約3万

ウ　各県のりんごのしゅうかく量をぼうグラフに表しましょう。

学びをいかそう　さがしてみよう

② わたしたちの身のまわりで，がい数がどんなところで使われているか，みつけましょう。

グラフを一目見て、子どもたちは声を上げました。

「青森、圧倒的だね」と。

これらの記述や問題からも分かる通り、「青森といえばりんご」という認識は、おそらくほとんどの日本人がもっているでしょう。

そこで、ふと授業中に尋ねてみました。

「青森ではなぜリンゴの生産が盛んなんですか」と。

すかさず、ある子が答えました。

「気候が適しているからだと思います。」

この答えが出てきたならば、多くの学校では「素晴らしい！」と褒められ

る対象になることでしょう。
　塾などで先んじて勉強したり、本などですでに読んでいる子などが、「気候」の話を回答することはままあることです。
　でも、私はあえて次のように切り返しました。
　「それ、本当？」と。
　子どもたちは「えっ」と驚きました。
　この答えなら「褒められる」と瞬間的に思っていたのかもしれません。
　でも、よく考えてみれば、青森と似ている気候の所はたくさんあります。
　岩手や秋田だってそうですし、北海道もそう。
　でも、先のグラフを見ても分かる通り、青森のリンゴの生産量は群を抜いています。これだけ突出したデータが示すのは、「気候的条件」だけでは因果関係が説明できないということでもあります。
　私の「それ、本当？」の切り返しに、子どもたちはすぐさま調べ始めました。このあたりの瞬発力は、最近ますます磨きがかかっています。
　私が、「〇〇って何？」とひとたび新しい単語について尋ねれば、子どもたちはあっという間に辞書をめくって調べ始めます。
　このリンゴの話題の時も、子どもたちはあっという間に答えを調べ上げました。子どもたちが発見したのは、次の文章です。

私たちが現在食べているりんごは、明治 4 年に日本に導入され、青森県では明治 8 年に国から配布された 3 本の苗木（まだ実がならない小さな木）が県庁の敷地内に植えられたのが始まりです。その後、りんごが少しずつふえて明治 42 年には全国で一番りんご畑が多い県となりました。 りんごは涼しい気候に適した果物です。青森県は北にあるので、涼しい夏がりんごに適していたことや広い土地があったこと、冷害でお米があまりとれない年があり、りんごが大切に作られていたこと、そして、たくさんの人の熱意と努力があったからです。

気候的条件以外にも、社会的条件や歴史的条件、そして人為的な条件などが組み合わさって、現在の姿があるわけですね。

「青森のりんご」と一言にいっても、その背景には様々なストーリーがあるんです。

いま私たちが食べているりんごは、西洋りんごです。「西洋」とはヨーロッパやアメリカのことです。西洋りんごが日本にやってきたのは、明治時代です。江戸時代から明治時代に変わったとき、日本は国を豊かにしようと、外国から色んなものを取り入れました。その中にはりんごをはじめとする果物の苗木もありました。

国から全国に配布されたりんごの苗木は、青森県にも明治8年（1875年）に3本届けられました。それを青森県庁に植えたのが青森りんごの始まりです。

ちょうどそのころ、江戸時代に武士だった人たちが明治時代になり仕事をなくしていました。そこで、元武士たちに仕事を与えようということで、その人たちを中心にりんご作りがはじまりました。

りんごの苗木は全国に配られましたから、各地でもりんご栽培は始まりました。

では、なぜ青森県がりんごをたくさん作るようになったのでしょう？

それには、元武士で青森県庁の職員をしていた「菊池楯衛」さんの働きがありました。菊池さんは県外の色々なところに行ってりんごについて勉強し、青森県の気候がりんごを作るのに向いていることを確かめました。

そして、多くの人々にりんごの栽培技術を広めました。菊池さんが居なければ、青森県は今のようにりんごをたくさん作るようになっていなかったかもしれません。

ちなみに、青森のリンゴについて、私は次のことも尋ねてみました。

平成３年９月28日早朝、台風19号が青森県を襲いました。前代未聞の猛烈な風が吹き、建物等には甚大な被害。収穫期を間近に控えたりんごもほぼ壊滅状態となりました。

実に、育てていたリンゴのおよそ９割が風で落ちてしまい、売り物にならなくなってしまったのです。

リンゴ農家の方は絶体絶命のピンチに陥りました。

このままでは、廃業です。

何とかして、残った１割のリンゴを多くの方に、しかも高値で買ってもらわねば、リンゴを作り続けることはできなくなってしまいます。

ここで、子どもたちに問いました。

リンゴ農家の方は、どんなアイディアを出して、この残ったリンゴを売ったと思いますか？

これは、もはや国語や算数や社会の学習の範疇を飛び越えている課題であるのは間違いありません。

それでも、子どもたちはこの難解な問いにも立ち向かってきました。

「ひるむ」ということを、知らない様子です。

最終的に、後藤さんが答えにたどり着きました。

「落ちなかったりんごだから、全国の受験生に売ったんだと思います。」

この答えが出てきたときは、教室に拍手が沸き起こりました。

ピンチに陥ったリンゴ農家の方々が考えたこと。

それは、名前を「落ちないリンゴ」として、受験生を応援する商品として販売することでした。

桐の箱に入れられ、「台風にも負けなかった強いリンゴです」とのコピーは全国の多くの人の心に届きました。

そして、そのご利益にあずかろうと、多くの方が、このリンゴを購入したのです。

かくして、残った１割のリンゴの価値は劇的に高まり、リンゴ農家の方々はピンチをチャンスに変えることに成功しました。

このリンゴは、ちなみに今も販売されています。

検索すると、次の写真が出てきます。

「青森のリンゴ」という、日本人なら誰しもがなじみのあるフレーズからでも、色んな学びが実現可能です。

深く掘ったり、別の視点から考えたり、色んな学び方をこれからも楽しんでいきましょう。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit